あかるいまち 21

No.1699　2024 年 12 月 11 日
組合員活動推進課 082-532-1264

	12 月	2024 年度
組合員ふやし	52 人	967 人
出資金ふやし	292 万円	9,638 万円
純　　増	△168 万円	△662 万円

被ばく 80 年の歩み～理事会社保平和委員会

11 月 22 日（金）、理事会社保平和委員会主催による公開学習会「被ばく 80 年の歩み」を開催しました。講師には広島県原爆被害者団体協議会理事長の佐久間邦彦さんをお迎えし、38 名の組合員、理事、職員が参加しました。この会では、広島に投下された原子爆弾がもたらした悲劇と、その後の復興、さらに核廃絶を目指した取り組みについて学ぶ機会となりました。

1945 年８月６日、広島は人類史上初の原子爆弾の被害を受け、数十万人が命を奪われました。被爆後、広島市の人口は戦前の半分となり、生き残った人々は食料や住居を失い、瓦礫の中での過酷な生活を余儀なくされました。生存者の苦しみは言葉では言い尽くせないものでしたが、復興の道を歩み始めます。戦後、広島は復興だけでなく、平和への思いを形にする取り組みを進めてきました。1949 年には「広島平和都市建設法」が制定され、広島市が平和の象徴となることを目指した都市づくりが始まります。同年に創設された広島野球倶楽部（現・広島東洋カープ）の設立には市民の熱意が込められ、希望の灯がともされました。1950 年には世界で核兵器廃絶に向けての最初の具体的提起（ストックホルムアピール）があり、日本では 645 万筆、世界で４億 8200 万筆の署名が集まりました。1955 年の第一回原水爆禁止世界大会や、1956 年に広島県原爆被害者団体協議会設立、日本原水爆被害者団体協議会結成など、国際的な平和運動と広島の関わりについてもお伝えいただきました。

最後に佐久間さんより「若い人たちと一緒に明日の日本を考えていかないといけない、これがノーベル平和賞受賞の重みです」とお話しいただきました。参加者からは「広島にいながら知らないことがたくさんあり詳しく学ぶことができて良かった」「被団協の歩みや今後の展望ついてもっと知りたい」との感想が寄せられました。平和を願う活動の背景には、命を落とした多くの人々への思いと、「二度と繰り返してはならない」という強い決意が込められています。被爆から 80 年が経ち、当時を知る方々が少なくなっていく今、私たちの世代が核兵器の非人道性を伝え、平和のための行動を継続していく必要があります。過去の出来事をただ「歴史」として学ぶのではなく、それを未来の平和にどう繋げていくか日々の暮らしの中で考えることが大切だと深く感じる学習会になりました。